

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.10 その1

会社より山小屋のほうが居心地がいいようで（その1）

土居将人（府中市）

小菅村からは奥秩父をはさんで反対側——上級者から初心者まで幅広い山好きに親しまれるハケ岳。主峰の赤岳からは諏訪湖、奥には北アルプスが見え、振り返れば雲に浮く富士山を見ることができ

る。気温は街に比べ10度ほど涼しいが、冬には-20度を下回ることもあり、人を吹き飛ばす激しい風が吹く。そんな場所にあるのが「天望荘」だ。

INCHのキャンプから繋がるこの山小屋バイトは、いろいろなものが見えてくる。今回はそういった山小屋の生活を紹介します。

◇忙しいとき、暇なとき

天望荘の1日のスケジュールは、4時から始まる。5時朝食、掃除と夕食の仕込みを終えたらひと段落して、昼に売食、風呂沸かしなど雑務をこなし、17時に夕食、スタッフの夕食は早くて19時で、21時に消灯する。朝、晩、そして昼の食事どきが忙しいので、合間をぬって休憩時間をつくり、シャワーを浴びたり昼寝している。また季節や天気によっても異なり、毎週末や長期休暇は休憩もとれないほど忙しいし、台風が来れば開店休業になる。

このように、毎日のルーチンに限れば意外と空き時間がある。問題は荷揚げのヘリ対応や遭難事故への対応などイレギュラーなことが起きること。一気にあわただしくなり、時にはお客さんに手伝ってもらいながら、どうにか営業している。



＜梅雨明けの赤岳展望荘。奥には富士山。＞

◇山小屋は千差万別

山小屋のイメージは人によって様々だ。木々に囲まれ、さびれた建物にランプが灯り、晴れた日には散歩に出かけ、通行客と気さくに話す・・・といっ

た牧歌的な印象をもつ人も多い。あるいは旅館のように何でも揃い、掃除が行き届き、気のいい女将が出迎えてくれると思うだろうか。いやいや考えたこともない、という人がほとんどだろう。

実際のところは小屋によって全く違うのだが、立地でおおよそ決まる。車でアクセスできる場所なら物資の運搬が容易なので、案内所が併設された旅館のようなものだ。ごはんも豪華だし、サービスの質もいだろう。一方で山の奥に建つ小屋は、飲用水が無かったり、ウナギの寝床のような相部屋だったり、不便や窮屈さが際立つ。この不便さが小屋によって様々であり、小屋の雰囲気も千差万別である理由でもある。当たり前にあるものが無い、それが山小屋と旅館の大きな違いだろう。

ちなみに天望荘は、水が無いので雨水を溜めて炊事、水洗トイレ、風呂に使っている。風呂に入れるのが本当にありがたい。照明が明るいので山小屋というより合宿所のようなのだが、ご飯が豪華で、一定の評判をもらっているようだ。



＜大晦日は食堂でお祭り騒ぎ。＞

◇恵みの水・天水

前述したとおり、携帯やテレビが使えない、コンビニもなければAmazonも届かない、と山小屋は生活の根本的な部分が制限されることが多い。特に大変なのは水がない場合だ。日本では1人が1日に使う水の量が200L弱、そのうち6割が風呂とトイレ、食事でも35L程消費するという。山では

池や川、湧き水、雪渓の雪解け水を使い、場合によっては消毒して飲むのだが、これがまた薬臭い。さらに稜線沿いでは雨水を溜めるほか無く、トイレの水洗どころか、食器を洗う水さえ十分ではなくなる。某小屋の食事はおでんと漬物で白米を食べる夕食で、カレーやハンバーグは「食器を洗えないから」断念したそうだ。山では雨水（あまみず）のことを天水（あまみず、てんすい）と呼ぶ。まさに天からの恵みだ。もし無駄遣いを見かけたら、声を荒げてしまうかも。

◇日々是勉強

小屋で生活する以上、掃除や料理は一通りできるようになる。さらに生活の知恵や「小ワザ」を知る機会が多いのも山小屋ならではの。スタッフの経歴は料理人、デザイナー、あるいは潜水土と様々だし、アウトドア派が多いためか趣味も幅広い。地元料理やお土産をふるまったり、ひもの結び方、倉庫の収納術などなど、ちょっとしたことに詳しくなる。

特に勉強になるのは人間関係だ。楽しく仕事できるに越したことはないし、トラブルが続けば営業もままならない。大切なことは「報・連・相」、これができれば大抵うまくいく。実際、私はこれが苦手で失敗することが多かったが、分からないことを聞くだけでもスムーズにいくようになった。そして報連相が苦手な人が多いのも確かだ。ぜひ身に付けておきたい。ちなみに山登りという限定された趣味ゆえか、横柄な態度をとるお客さんは少ない。困った客といえば台風のなか登ってきて下山できない、など知識不足によるものが多く、（それはそれで困るのだが…）若者だからと見くびられることも少ない。俗世から離れた環境ゆえに社会生活のスキルが身に着くとは、なんとも面白い。



< 昨年の台風 24 号で流された橋も、協力してかけ直す。 >

◇小話 山小屋は先行き不安

お客さんの食事はもちろん、スタッフの食事（従食）や資材を運ぶために、ヘリコプターが活躍する。天候に左右される不安定な方法でも、歩荷に比べればすばやく大量に物資を届けられる、不可欠な存在だ。そしてこのヘリの運行が、今年の初夏に機能不全をおこした。

山小屋のヘリ事情に関しては、雲ノ平山荘のブログから発信され、地元紙の1面にも取り上げられた。詳しくは調べて頂きたいが、要約すると「ほぼ一社頼みの状況で、ヘリ会社の機材と人員が減り、ついにパンクした」ということ。小屋開けが後ろ倒しになったり、開けても客食を提供できなかったり、燃料の備蓄が無くなる小屋もあった。南ハケ岳でも急遽歩荷でその場しのぎをする小屋もあったが、ほとんどの小屋は営業を続けられたようだ。現在は一時の混乱は落ち着いたものの、長期的にみてハイリスクローリターンなヘリ輸送の未来は不安が残る。

今の私が考えることは、山登りが出来なくなるかもしれないということ。山小屋は難易度に不相応な登山客でも登れるようにする補助施設でもあり、遭難があった時の駆け込み寺でもある。その山小屋がなくなれば、10年もせずに登山道が崩落し、事故が増えれば入山禁止になりうる。もしくは富士山のように入山金を徴収し整備に充てても、登山客じたいが減れば小屋の営業期間を短くせざるを得ない。いずれにしろ現状の快適さを維持することは、かなり大変なことだとみている。

山登りという趣味も、じつは多くの支えによって成り立っていた。その一端を担っていると思うと人ごとではないのだが、何もできない無力さも思い知る。小屋バイトにできることは、お客さんを見送ることだけだ。

(つづく)

土居将人：高校～大学でワンダーフォーゲル部所属。大学卒業後に勤めた会社より山小屋のほうが居心地がいいようで、実家にも帰っていない。最近 You Tube を使い始めた。

（事務局より）：土居くんは、ぬくい少年少女農学校、ちえのわ農学校、こすげ冒険学校の参加者でした。スタッフ経験ももちろんアリ。

